

続

とちぎの  
サムライ

vol.29

ここ数年、城址歩きをしていると、さまざまな城と歴史に関わるようになります。毎回のことですが、自分勝手に書いておりますので、史実と異なる部分があるところはお容赦願います。

(一社)宇都宮建設業協会 木澤喜人

## 全国津々浦々 お城めぐりの旅

# 柳生 剣聖の里

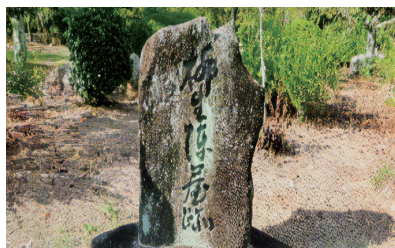
私は、どちらかという昔から時代劇が好きで、特に宮本武蔵とか、柳生十兵衛といった剣豪に惹かれました。弱きを助け、自分の信念を貫く。そのための厳しい修行を続けていく。ドラマの最後は、必ず正義が悪を倒していく。ワンパターンの展開でも、毎回ハラハラしながら見ていたことを思い出し、今も変わらないな〜と実感します。今回は、奈良の城郭を見に行こうと思い、ついでに柳生十兵衛の故郷に立ち寄ってきました。剣聖の里・柳生は柳生氏が1万石の藩主として治めたところでした。奈良の平城京跡から東に直線距離で16kmの所に、柳生があります。戦国の当時、他者を斬り殺すのみを主眼としていた時代に、柳生新陰流は、人を生かす平和の剣として柳生宗厳(むねよし)が生み出した流派でした。常に自分に打ち勝つ心の修養の大切さを説いています。柳生には歴史遺産が数多くあり、今でもこの静かな山里に柳生家の精神を感じるような気がしました。



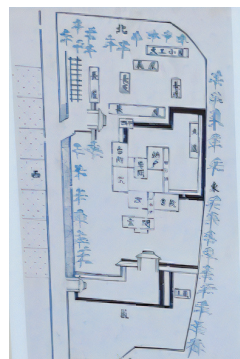
まずは、柳生陣屋に行ってみました。柳生氏は古くから大和国柳生荘の豪族でした。8代目の柳生石舟斎(宗厳)は慶長5(1600)年、関ヶ原合戦の功により、徳川家康より柳生の旧領2千石を与えられました。寛永13(1636)年、石舟斎の後を継いだ柳生宗矩(むねのり)は、徳川将軍家で秀忠・家光の兵法指南役を務め、1万2,500石を拝領しました。寛永19年、柳生宗矩は居館として正木坂に陣屋を築きました。十兵衛の弟の宗冬は、将軍家綱の剣道師範を務めました。以後、柳生氏が代々続き明治を迎えました。柳生家は武門の誉れは高かったのですが、将軍家の剣道指南役として江戸定府大名であったため、柳生は城下町としての発展はなかったのです。



柳生陣屋跡



柳生陣屋跡碑



柳生陣屋 配置図

柳生陣屋は、柳生新陰流を生み出した石舟斎の子の宗矩が亡父の菩提を弔うために芳徳寺を建て、引き続き3年の歳月を費やして寛永19年この地に陣屋を建設したものです。「柳生藩旧記」によると坪数は1,374坪、表は竹の枝門であったと記されているようです。その後、宗冬により増築整備されましたが、後の火災により全焼し、仮建築のままで明治の廃藩により姿を消しました。

次は、旧柳生藩の家老屋敷に向かいました。



旧柳生藩家老屋敷



玄関



庭園

江戸時代の後期に柳生藩家老として藩の財政を立て直した小山田主鈴の屋敷です。末裔の方が引っ越され屋敷は人の手に渡ったのですが、1964年から柳生を愛する作家の山岡荘八氏の所有となり、以後しばしばここに滞在したようで、NHK大河ドラマ「春の坂道」(柳生宗矩の生涯を描いたもの)もここで構想が練られたようです。1980年に山岡氏の遺志によって遺族から奈良市に寄贈されました。

次に、柳生城跡の芳徳寺に向かいます。城址の主郭周辺の城壘は往時そのままに鋭く削り取られており、堀切も深く、なかなか堅固であると記述されていますが、入口からヤブがすごく、夏場は侵入できませんでした。この芳徳寺も、もともとは城の郭を形成していた場所であったかと思われます。芳徳寺の手前の平場に「石舟斎墓城址」と刻まれた城址碑が建てられていました。石段、掘割の跡などが城の名残をとどめていました。

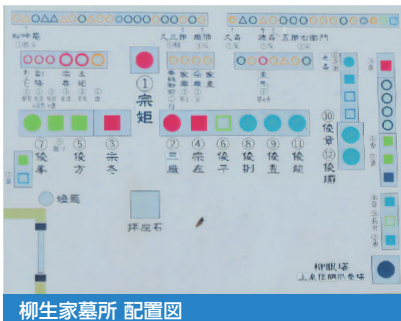
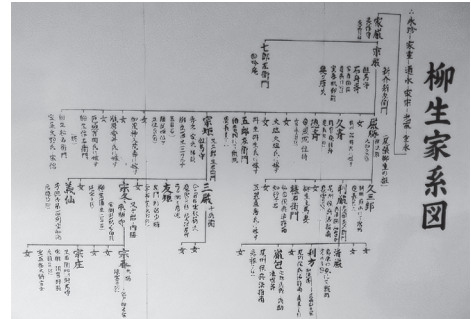
柳生家墓所は、初代藩主の宗矩の墓を中心に、12代俊順(としむね)までの藩主・一族の墓石・供養塔86基が整然と並んでいます。市内唯一の大家墓所です。



城郭のような芳徳寺



石舟斎墓城址碑



柳生家墓所 配置図



柳生家墓所



上泉信綱 供養塔

中央奥に柳生但馬守宗矩の墓(石舟斎の五男)。家康に仕え、秀忠・家光の兵法指南役を務め、家光のもとで大目となりました(初代藩主)。前列中央右側が、隻眼の剣豪として抜群の知名度を誇る柳生三厳(十兵衛)の墓です。十兵衛は宗矩の長男で、新陰流の研究に努めました。家督を継いで、4年後に急死してしまいました。右側の一番手前に上泉伊勢守信綱の供養塔がありました。上野国(群馬県)の武将で、剣聖と呼ばれ新陰流の開祖であり石舟斎に新陰流を伝授した人です。柳生新陰流として繁栄した柳生一族の大恩人です。{参照} ユーチューブ(空中散歩・大胡城)で上泉信綱を紹介しています。

『政治の心は仁慈でなくてはならない。権力がよこしまになった時、民は不幸になる。』十兵衛は父の教えをよく理解していました。剣の実力は父をしのぎ、当代随一の剣豪といわれました。その後、家光が夜の町で辻斬りに興じた時、体を張って諫めたことで家光の勘気にふれ「出社に及ばず」状態となりました。そして約10年間、謹慎を解かれるまで柳生の剣禅道場での新陰流の研究と門弟の指導にあたったようです。ちなみに、あの荒木又右衛門も弟子の一人です。「武士の帯刀は抜かぬが理想」「殺人剣は邪道、活人剣こそ武士のたしなみ」こうした柳生新陰流の新しい考え方が、十兵衛にここで訓育された1万3,600人の弟子によって全国に広まっていきました。TVドラマでは、どちらかという柳生一族は出世と闇の仕事のダークなイメージがあったのですが、どうも脚本家に乗せられていたのかも？とは言え、これだけ全国に弟子がいれば、各地の内部情報はすぐに集まったことでしょう。蛇足ですが柳生家の家紋「二蓋笠」の由来が面白いです。



二蓋笠の家紋は元の津和野城主の坂崎家の家紋でした。大坂夏の陣で家康は孫の千姫を救いたく、千姫を無事に救い出した者に姫を妻として与えると宣言しました。実際、坂崎出羽守は燃えている大阪城から姫を救って家康に届けました。しかし、家康の没後2代将軍秀忠がこれを破り、本多忠刻(ただとき)に嫁がせると聞き、怒った坂崎直盛は千姫が輿入れの時、奪い去ろうと襲ったのですが失敗しました。

これを聞いた秀忠は使者として柳生宗矩を指名して坂崎に切腹を命じました。坂崎直盛は43歳で切腹し坂崎家は断絶となりました。宗矩は坂崎事件の功勞として秀忠から伏見の邸宅と坂崎家の二蓋笠の紋を拝領し、以降柳生家の家紋となったとのことです。最後に柳生らしい話をひとつ。宗矩は亡くなる直前、枕頭を見舞ってくれた家光に、その時の俸禄1万2,500石をそっくり返上し、「倅どもは倅どもの器量に応じて…」私は自分がお預かりしたものはお返ししますと裸一貫の真情で目を閉じました。恩人の家康が好んだ朱子学(しゆしがく)の精神に則った言葉と振る舞いでした。さすが柳生の当主の生き様です。懐が狭く器量もない私には、返上なんてもったいなくて例え1万2,500円でも返上には躊躇し、眠れなくなりそうです。我ながら情けなや〜。頓首